

プロサッカー選手とがん

社会 を診る がん

中川 恵一

も、クロアチアのしぶとさが目立ちました。日本に続き、ブラジルまで同国にPK戦で敗れました。ブラジルの至宝ネイマールの涙が印象的でしたが、王様ペレはブラジル代表を続けるよう、ネイマールにエールを送ったそうです。そのペレも進化した大腸がんの闘病中で、病床から今回のワールドカップを観戦したようです。

今大会優勝したアルゼンチンにPK戦で敗れたオランダ



イラスト 中村 久美

の名将ファンハール監督も4月に前立腺がんで闘病中であることを明かしています。

昨年8月に3度目の代表監督に就任し、これで国際アマッチ20戦負けなし。PK戦で負けても、記録上は引き分けになるからです。前回オランダを率いた2014年ブラジル大会は準決勝で同じアルゼンチンにPK戦の末に敗れましたが、W杯でも「無敗」を続けたことになりました。

病気が発覚したのは2年ほど前ですが、興味深いのは、がんの治療と監督業の両立です。選手に動揺を与えないため、25回の放射線治療もこっそり受けたと報道されています。仕事とがん治療の両立のお手本ですが、放射線治療が体に負担の少ない治療であることが分かります。

オランダ代表は70年代のワールドカップで2度準優勝を

経験しています。その中心だったのがクライフです。

流動的なポジションニング、そして全員守備、全員攻撃の「トータルフットボール」と呼ばれた最先端のサッカーの体現者でした。現役引退後はスペインのバルセロナを、「ドリームチーム」に育て上げるなど、ファンハールと並ぶ名将と言われました。

しかし、クライフは肺がんのため、68歳の若さで亡くなっています。

現役時代からヘビースモーカーであったことは有名で、監督になってからはベンチでたばこを吸うシーンも見られました。心筋梗塞で倒れたこともあり、たばこがオランダのレジェンドの命を奪ってしまいました。

ただ、プロサッカー選手にはがんが少ないことが最近の調査で分かりました。一方、認知症が多いことが問題となつています。次回、詳しくお伝えします。

(東京大学特任教授)

サッカーワールドカップでは、日本代表に「新しい景色」を見せてもらいました。私の母校、暁星学園（東京千代田区）はフランスのカトリック修道会「マリア会」の宣教師が明治21年（1888年）に開校したミッションスクールで、サッカーが盛んです。私も小学校から高校の初めまでサッカー部に所属していました。サッカー解説者の松木安太郎さんは3年先輩です。

今回のワールドカップで